

調査研究終了（中間）報告書

研究分野：保健

調査研究名	新型インフルエンザが疑われる症例発生時の検査体制の確立
研究者名（所属） ※（印：副表）	○世良暢之、吉富秀亮、石橋哲也、千々和勝己、小野塚大介（保健衛生課）、重松美加（感染研）
本庁関係部・課	保健医療介護部 保健衛生課
調査研究期間	平成 21年度 - 23年度（3年間）
調査研究種目	1. <input checked="" type="checkbox"/> 行政研究 <input type="checkbox"/> 課題研究 <input type="checkbox"/> 共同研究（共同機関名： ） <input type="checkbox"/> 受託研究（委託機関名： ） 2. <input checked="" type="checkbox"/> 基礎研究 <input type="checkbox"/> 応用研究 <input type="checkbox"/> 開発研究 3. <input type="checkbox"/> 重点研究 <input type="checkbox"/> 推奨研究 <input type="checkbox"/> ISO推進研究
ふくおか新世紀計画 第3次実施計画	柱：いきいきと暮らせる安全・安心な社会づくり 大項目：健やかに暮らせる社会づくり 小項目：県民の健康くらしづくり
福岡県環境総合基本計画 (P20,21) ※環境関係のみ	柱： テーマ：
キーワード	①呼吸器系ウイルス、②A(H1N1)pdm09、③鳥インフルエンザウイルス
研究の概要	
<p>1) 調査研究の目的及び必要性</p> <p>目的 新型インフルエンザが疑われる症例発生時に適切な検査体制を速やかに整えるため、①平常時の呼吸器系ウイルスの実態把握、②平成21年度に発生したA型インフルエンザウイルスA(H1N1)pdm09の抗原変異や薬剤耐性を含めた遺伝学的な解析及び地域での流行状況の解析、更に将来の緊急時に備えて、③次の新型インフルとなる可能性が高い鳥インフルエンザウイルスのプライマー/プローブの設計等を目的とした。</p> <p>必要性 平成21年度にA型インフルエンザウイルスA(H1N1)pdm09が発生し、世界中に急速に感染拡大したが、幸いに死亡率はそれほど高くなかった。一方、アジアにおいては強毒型の鳥インフルエンザウイルスによる患者死亡が相変わらず報告されている。危惧されている次の新型インフルエンザウイルスに備えるためには、①異常値を速やかに検出するための平常時の実態を把握すること、②平成21年度に新型インフルエンザウイルスとして発生したA型インフルエンザウイルスA(H1N1)pdm09の詳細な解析からの教訓を得ること、③鳥インフルエンザウイルス用の検査体制を整備しておくことが必要である。</p>	
<p>2) 調査研究の概要</p> <p>2.1 平常時の呼吸器系ウイルスの実態把握 2.2 A型インフルエンザウイルスA(H1N1)pdm09の解析 2.3 鳥インフル検査体制の整備</p>	
<p>3) 調査研究の達成度及び得られた成果</p> <p>3.1 平常時の呼吸器系ウイルスの実態把握 ①呼吸器系ウイルス網羅的迅速検査法を開発した。 ②350検体について検討し、19種類の呼吸器系ウイルスの季節・経年変動を明らかにした。 3.2 A型インフルエンザウイルスA(H1N1)pdm09の解析 ①1,223検体について検査し、803検体からA(H1N1)pdm09を検出した。 ②122検体について、抗原性変異の解析を実施した。 ③155検体について、薬剤耐性の解析を実施した。 3.3 鳥インフル検査体制 ①鳥インフルAH7及びAH9のプライマー/プローブを設計した。 ②インフルエンザウイルスAH3亜型及びA(H1N1)pdm09の地域遷移を検討した。 ③感染症発生动向調査事業で搬入された感染性胃腸炎検体の陽性率を約50%から約70%へ改善することができた。</p>	
<p>4) 県民の健康の保持又は環境の保全への貢献</p> <p>当所のホームページ、行コミメールによる情報配信を開始した。保環研ニュース、講演会等による情報発信を実施した。新聞社、テレビ局等へ積極的に情報を提供した。</p>	
<p>5) 調査研究結果の独創性、新規性</p> <p>5.1 福岡県内の呼吸器系ウイルスの実態を初めて明らかにした。 5.2 福岡県内のA(H1N1)pdm09には抗原変異及び薬剤耐性が認められないことを明らかにした。 5.3 鳥インフル用のAH7及びAH9のプライマー/プローブを設計した。</p>	